

「ヒヤヒヤ・ドキドキの沖縄再訪の旅」 田井 勲

孫たちの春休みを利用した沖縄3泊4日の旅に、僕たち爺婆夫婦が連れて行ってもらった。娘と二人の孫娘と私たち5名の道中である。沖縄へは、娘が独身時代、息子も理容師から美容師に変身した頃25歳頃だったと思うが、彼の先導で初めて行った。那覇空港からレンタカーで市内観光に飛び出したとたん、仕事に出たばかりのサラマンの車と衝突した。怪我するほどの事故ではなかったが息子も出発したばかりの事故だったのでショックだったようだ。しかし、レンタカー会社は、慣れたもので、「ハイ、どうぞ」とすぐ代車に替え、事なきを得たが、その頃は街中では信号機が余り多くなかった気がした。東京と同じように運転する危険だと分らされた。現在では東京と同じになっている。その時には、通常の観光ルートで、首里城とか玉泉堂の鍾乳洞とか、かなり色々な所を見てまわったのを覚えている。今度の旅程は、娘や孫たちが決め、宿泊所やレンタカーによる交通などもすべて計画されていたので、私たちはただほうと乗って連れて行ってもらうだけで、気が楽なものであった。しかし、先の旅行が那覇に着いてすぐの事故であったが、今度は、羽田空港で、フライトする前に悶着が起きた。老夫婦は行動が遅い割には気が早い。30分も家の前で迎えの車を待っていた。孫たちは皆日曜日は朝寝坊で、仲々早く起き出した。やっと来て、娘の車で、運転は大学生の「こちゃん」がする。大学入学前に免許を取り、3年生の今は、もうベテランのドライヴァーである。スイスイと順調に行き、羽田空港に着いて、その悶着は起きた。帰りのときまで駐車するはずになっていた、あてにしていた空港そばの駐車場が満杯で、入るための長蛇の列の渋滞にはまってしまった。これは「ママ」と娘のミスだった。予約しただけは良かったのに、わずかの予約料をケチったためにこの破目になった。さあ、どうする。ママはスマホで必死の対応しているが、この連休での日曜の出発日、どこも満杯。彼女はくじりを埋ようと必死になったが、どうしようもない。冷静だったのは、ドライヴァーのこちゃんの方で、「早く他の場所を探さない」と間に合わないよ、この列を離れないとダメだよ」と言うが、ママは決断がつかない。駐車場へのドライヴウェイに入ってはったら、そこから抜け出すのにかなりの時間がかかるだろう。警察官志望のこちゃんの決断は、さすがに素早かった。「ママ、離れるよ!」と言いさま、寸手のところで本線に戻り、空港へ向った。空港で、爺婆と妹のモモちゃんと荷物を全部下し、ママとこちゃんて他の駐車場探しに出かけた。婆は重い荷は持てないので、爺とモモちゃんて、大きな荷物を持ってケートへ向った。我々が搭乗するのはANA462便で、荷物のチェックをすませ搭乗口に並んだ。ご承知のように飛行機は、電車に乗るのとは違って、かなりの時間を要す。機内に入る前にどうか間に合ってくれと、心に願うだけで、我々にはどうすることも出来ない。もく間に合わなければ、3人だけで先に行ってくれとママからのメールが入っているらしい。僕はケータイも持っていないから、妻に入って来る彼らからの情報を知るだけだが、空港モジュールに沿って行って、浜松町駅での中周くらしい所にある天空橋駅まで行って探しているらしい。飛行機の出発は、予定時刻通り出発が望ましいが、このときはやはり、何かの理由で遅れてくれないものかと思った。皮肉なことに、帰りのフライトは、事件が起きて4時間も遅れたのだが、行きは定刻通りであった。妻などは、ずっと必死に神さまにお祈りしていた。搭乗時刻が迫って、10分以内に来ない

ゲートが閉められてしまう。妻などは、ゲート閉門をすし遅らせてもらえないか掛け合ってくる
とまで言い出すけど、僕は3人で先に行くのもやむなしと思い始めていた。今日中には2人
は別の便で乗ることになるだろう。別運賃による予算オーバーもやむなしか、そう思い始めて
いたとき、妻のスマホに、今空港に着いたの報た。「急いで走れば間に合うだろう。」って。
ゲートが閉まる寸前、2人は駆け込み到着、危機一髪で間に合った。後で2人に話しを聞
くと、すべてがギリギリセーフで「天空橋」は帰路ここから乗車したので分ったが、この付近は色々と
イベント会場ができ、駐車場はいつも満杯で、2人は別々に、出そうな車を探し、体当りで尋ね、
出る車のすぐ後に駐車して、モルールの電車に飛び乗った。ひと電車乗り遅れたらアウトだった
ろうと言っていた。ママの「大阪のおはんめ」的体当たりかひの実行力とこっちゃんの反射的な機敏
な判断力と、あとは2人の駆けやる力がギリギリのセーフを可能にしたようだ。英語には、こんなとき
に言う、いい表現がある。“by the skin of one's teeth” (歯の皮一枚のうすさで)「辛じて」
正にこの表現の通りに間に合った。3時間のフライトの後、我々は那覇に着き、空港からモル
ールに乗った。かつて来たときには、このモルール建設が始ったばかりの時だった。栄美橋駅で下車し、
10分くらい歩いて宿に着いた。そのホテルは5階建ての最新式ビルで、客はいるが従業員が一人もいなか
た。総ガラスのロビーに人影はなく、テーブルの上に4台の端末器があるだけ。しかも内に入る手段がない。
客が内から外に出て来たので、そのスキに入った。入る方法をスマホで聞くと、あらかじめ暗証番号は知らされて
いて、それを押し入るようになっていたらしい。人影と云えば、時間を決めて汚れ物やタオルを交換するアルバイト
の人が出入りするだけ。食堂も風呂もない。シャワー室とトイレなどは最新なもので実にキレイであり、ベッドは
2段式だが広々として実に快的である。テレビなど最新の大きな4K型が壁面にワラせていて、すべて合理的
で使い勝手が良い。これも人件費をけずってコストを低くおさえるためで、コロナ禍以降の究極のホテル様式なんだ
なと、娘の着眼点に感心した。3泊した居こちは仲々快的であった。今回の沖縄観光の主眼はキレイな沖縄
海を堪能するためだったようだ。美しいサンゴ礁のビーチ、有名な美ら海水族館に行くことだった。そして旅には食
事も楽しみのひとつである。僕は最初の晩、近くの国際通りの盛り場で食べたビーフステーキが最高に良かった。

その晩は妻は疲れて夕食に出ず、爺と娘一家で出かけた。どこも多くの観光客でひしめいており、どの店にも「ステーキ」のカ
ンが出ていて格安である。あるモウモウと煙が立ち込める賑やかな店に入り、M2のM=2を僕が注視すると皆それにな
らい4人で鉄板の上でジウジウと音立てる部厚いステーキに舌鼓を打った。平塚だったら陪の値だったろう。余りに美味
だったので次の晩も同じ店でステーキを食べた。帰路もまたドキドキの連続だった。帰りのフライトは、同じANA 462便で、
11:20発、羽田 13:40着の予定であった。来た時の事があったので、早めに那覇空港に着いていた。ところがその
事件発生、乗客の1人がナイフを所持し、それに気づき、屈ければ事無きだったのを、その辺に放置したため「保安問題」が発生
し、くまなく点検、整備となり、すでに安全点検された手荷物も調べ直しという事になり、各フライトに多くの遅れが
生じた。11時20分発が何んと、4時頃となり、自宅に着いたのは夜の8時過ぎになってしまった。

唯一よかったことがあった。それは那覇空港で待たされた時間帯にWBC野球大会の決勝戦、
日本代表の試合があった事で、みな手持のスマホでその試合を見ていた。僕らは2階の出発ロビーにいた
が、こっちゃんなどは1階でやっていたテレビ中継を見に行っていた。大谷選手が最後に投げて、相手
を三振に打ち取って勝利した瞬間、空港全体がわき上がった「ウワーッ!」と云う歓声に包まれた。
このことは後々までも一生の思い出になることだろうと思った。